

一九七七年十二月一日第三種郵便物認可

発行所〓社会通信社

発行人〓滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ケ谷九〇四

電話(03)3377-4649

FAX(03)3299-5367

振替〓〇〇一〇〇一〇九一五八四三二 労金〓中央労金本店 No.1154163

購読料〓月額700円

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

独占資本と金融再編成

滝野 忠……………2

壮 大 な ム ダ

― G8を評価する ―

3

厚生省、社保庁が犯人なのに

― 社会保険庁解体攻撃の職場の現状 ―

5

J P 民営分社化から七ヶ月

― ギスギス満開の職場 ―

6

新銀行東京、築地市場移転、オリンピック招致

― 三文作家、さあどうする ―

8

自己責任で国の責任は放免

― 道州制導入の帰結 ―

11

◇資料◇ 地方政府創造会議 (「せんたく」)
活動 目 標 の 概 要

13

読者からのおたより……………14 編集部だより……………10

刊 旬 社 会 通 信

NO. 1029

二〇〇八年八月一日号

二〇〇八年八月一日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

独占資本と金融再編成

独占資本との言葉がなくなった。せいぜい大企業、寡占である。「独占」は、市場の価格支配を含む。「大企業」にはそれがない。独占資本は市場を支配し、競争下でも生産価格を上回る価格をつける、そうした資本である。大競争、そしてものすごい生産性の発展、安い労働力は独占資本の市場支配力を不安定にした。そのことが、独占資本の概念をかき消したのである。

新自由主義、多国籍企業、グローバル資本といった現代資本主義の現象が資本家のみならず、わが方からも羅列される。現象に眼を奪われた悲しい現実である。

新自由主義、多国籍資本、グローバル資本の実態、担い手は誰か。独占資本である。アダム・スミスの自由主義の時代のように小さな産業資本が競争する牧歌的な時代ではない。独占資本が世界を駆けめぐり、覇を競う。それが現代の「自由主義」である。「弱者」はすべて切り捨てられてゆく。

マルクス経済学者の多くは、①規制緩和による安売り企業の進出、②すさまじい技術革新による生産価格低下、③労働力市場拡大、④製造業・非製造業を問わぬ内部留保金の膨脹、⑤間接金融から直接金融の進展で、金融資本、独占資本は姿を消し資本主義が新たな段階に入ったかのように論じた。

これは本当か。ウソ、思想的墮落である。間接金融から直接金融で金融資本は力を減らしたか。逆だ。彼らの力はいや増した。社債、株式売買を仲介するのは証券会社に変わりない。

MアンドAという企業の集中・合併を仲介するのも証券会社、投資会社、商業銀行である。金融ビッグバン（金融自由化）は業態のかきねをとつ払った。これら金融資本は産業・商業資本に介在し、分社化、子会社化、会社の売り買い、さらには破たん企業売買で儲けを上げる。

世界競争戦はこの十年余、日本金融界を一変させた。かつての六大財閥は①三井住友、②三菱UFJ、③みずほ、④りそなに再編された。この背景に独占資本、証券業界、投資銀行（信託銀行）の巨大化がある。証券会社の「王」が野村である。これら金融会社は持株会社（旧財閥本社と同じ）化し、事業会社を傘下におく。

四大金融グループ、そして野村の持ち株会社と事業会社の関連はどうか。三井住友は役員一三人、社員九九名（平均年齢三八・六歳）が連結会社四万六千人余、子会社一万八千人、みずほは役員一四名、社員二二三名（平均年齢四一・四歳）が五万名、二万八千名、三菱UFJは役員一五名、社員五五〇名（平均年齢三八・七歳）が社員八万一千名、四万名、りそなは役員九名、社員三二七名（四〇・五歳）が、一万六千、一万五千人を「統轄」する。

これに対し証券会社の野村は役員一名、社員七名が連結一万八千人、子会社一万二千、大和は役員一三名、社員二五七名が一万五千人をやはり統轄する。独占企業は

市場を独占するだけでなく、グループ会社を％に満たない人員で管理・統制する。

これら金融資本はどれほどの資産をもつか。三菱UFJ二百兆、りそなは四十兆、三井住友百兆、みずほ百五十一兆。国家予算は約八十兆、GDPは五百五十兆円である。四大金融グループの資産力はGDPに等しい。民営化されたJPグループの郵貯二百兆、保険百五十兆を加えればGDPをはるかにこえる。

金融持株会社は国家予算の二倍をもち、約一千人が千兆を運用する。持ち株会社の社員は官僚世界でいえばキャリア。キャリアとノン・キャリアでは世界が違う。ノンキャリアにはキャリア組は「雲の上」の人。いま公務員制度改革でキャリアの登竜門である階級制試験廃止が喧伝される。たとえそうだったにせよ、幹部候補生として官僚世界に入った者とそれ以外のものとの差別は現状と変わることはない。

(滝野 忠)

壮 大 な ム ダ

— G 8 を 評価 する —

サミット 三つの段階

「サミットは終わった」。これが三十四回を重ねた洞爺湖サミットの結論である。

サミットは一九七五年に始まった。三つの段階を経、今がある。一九七〇年代は資本主義の危機の時代だった。米国を中心とする帝国主義六ヶ国はランブイエで新たな「ソ連Ⅱ社会主義」包囲網づくりに舵を切った。一九八〇年代後半、サミットは第二段階に入る。「ソ連・東欧社会主義世界体制」崩壊である。サミットの役割は分解したソ連邦から独立した国家群、東欧諸国家群を資本主義国家に誘導することになった。ロシアのサミットへの参加（一九九七年）は、その完成だった。サミットの歴史的役割はこの段階で終えた。その後のサミットは惰性である。

国連は今、一九二の国家・地域組織の巨大な機関となった。五ヶ国で構成される安保理常任理事会は、発展途上諸国を納得させることはできぬ。というわけでズルズル続けられたのが現状であろう。この第三段階に異変が起きた。中国、インドの「巨大国家」の高成長である。この二つの国だけで世界人口の三五％を占める。サミットの第二段階までこの二つの国は資源・食料の「飢餓輸出」国だった。それを輸入国に変えた。天然資源、食料価格はこの数年で三〜五倍にもハネ上がった。そこにブッシュの外交政策破綻、金融不安である。洞爺湖サミットは世界情勢激変化の会議となった。

環境 階級協調の道具

貧困国は「パンを」と政府を攻めたてる。食糧暴動である。発展途上国、新興国では物価高騰が当たり前となった。政府批判は抗議・ストライキ運動となり情勢は緊迫する。先進国も同じ。ブッシュは地獄が待ち受ける。ブラウン、メルケル、サルコジ、ベルルスコーニ、そして福田は墜落寸前だ。この傾向はBRICs国家群として参加

を許された国ぐに指導者も変わらない。

世界政治・経済に矛盾が吹き荒れる。「屁の河童」内閣・福田首相がテーマとしたのが①地球温暖化、②アフリカ支援である。なぜか。世界経済―①原油・ガス、②食料、③金融、④ドル・為替、世界政治―①六ヶ国協議、②中東和平、③アフガン・イラク・シリア・イラン等は各種会議で多くの時間・金を消費し、論じつくされている。それでもなにより一つ結論はでやしない。

この一年、NHKを先頭に温暖化↓地球の危機↓人類の危機が宣伝された。北極・南極の解氷、それにとまあ海面上昇、そしてヒマラヤ、アルプス、アイスランド、パタゴニアの氷河の解氷、そして極地の生き物の象徴である北極熊の生態系「破壊」物語・熊の死がこれでもかこれでもかとくり返し放映される。

映像に写し出される生き物はすべてかわい。その彼らが死滅の危機に追いやられているとの宣伝は、資本にもて遊ばれていながら資本を許容し、しがみつ、心優しい労働者の感性を揺さぶり、「蟹工船」、「セメントダルの手紙」で現状をしらしめされた若者の心をソッチにもつていく。環境、アフリカ支援は全人類の問題というわけだ。

豪華料理で貧困論ずる愚

洞爺湖サミットは①二国間首脳会談、②G8首脳会談を中心に、③アフリカ七ヶ国とG8、④新興五ヶ国とG8、⑤主要排出国との会合が伝導装置のように「消化」された。貧困問題をぜいたくな料理を食べながら論議するといったようである。偽装、欺瞞そのものである。

サミットはいつもそうだが、事前のさまざまな会合をふくめ二〜三ヶ月余もつづく。サミットが世界人民にとってなんのプラスにもならないことは誰もが知っている。会議は人民衆知の中でなく、人民を隔離しておこなわれる。会議に金をかけるだけでなく、会議と人民を切り離す警備にもすさまじい金が使われる。

油に象徴される資源輸出国は富を蓄積した。彼らは安くなるドルを貯め込むことより、ドル資金を使って投資、投機に邁進する。油、食糧価格は上がりつづける。これらの恩恵から無縁な国ぐに、貧乏人は反乱を起こす。こうしたなかでの今回のサミットである。G7の国ぐにだけでは世界を制御しきれなくなった。新興国といわれる中国、インド、ブラジル等が招き入れられ、貧乏国のアフリカ諸国が「アフリカ支援・発展」を名目に動員された。福田は五月、TICAD（アフリカ開発会議）で五十ヶ国を招待し、ODA（政府開発援助）、民間投資、アフリカ開発銀行への円供与、その他無償資金協力に五千億円ちかく大盤振る舞いした。その目的はアフリカ開発の拡大合（七ヶ国）、を名目にした資源確保である。

サミットは首脳宣言を中心に五つの議長声明、そして議長総括が発表された。長い長い文案だが具体的な結論はなに一つなく、G8間の、そしてG8と招待された十四の新興国との国益のぶつかり合いだけが目立った。

厚生省、社保庁が犯人なのに

― 社会保険庁解体攻撃の職場の現状 ―

消えた年金とは、「宙」に浮いた年金とは

一九九七年、基礎年金番号制度が導入された。当時、国民年金または厚生年金に加入していた年金番号を基礎年金番号とするものであった。当時、社会保険庁（霞ヶ関幹部）は、年金を請求する際に、請求者に職歴あるいは国民年金に加入していたかどうかを確認すればよいという考え方を示して現場を指導してきた。しかしながら、すでに六〇歳以上で年金を受給している人の記録は確認することができずになってしまい、「宙」に浮いた記録がある。

また、事業主が雇用の際に、厚生年金に加入していたか否かを確認せずに新たに厚生年金番号を取得させた事例もあり、一人の人が五つも六つも厚生年金番号を持っている人もあり、これが「宙」に浮いた記録である。

社会保険庁は、マイクロフィルムで管理された記録をコンピュータに入力しようとはせず、労働組合の「記録をすべてコンピュータに入力せよ」との要求には応じようともせず、今回の記録問題を厚生省、社会保険庁の責任を不問とし、すべて社会保険事務部門現場の職責に押し付けてきている。

職員は疲れきり、団結は崩される

社会保険事務所には、私の職場だけでも毎日、四百人のお客が押しかけてきます。「俺の年金を返せ、お前らが勝手に使い込んだだろう」「待ち時間が長すぎる」「駐車場が狭すぎる」という苦情、罵声が浴びせられる。職場では年金特別便が発送されてから、日常業務（自分の本来の仕事）をせずに、特別窓口を十六も臨時増設を行い。お客に対応している。

四月からは毎日夜七時まで窓口対応、土曜、日曜日も窓口を開けて対応させられている。また来訪者の記録の整備、来訪者数を翌日の午前中に報告しろといわれているため、夜七時からコンピュータの入力業務を行い、毎日九時一〇時まで残業している仲間もいる状態である。（予算がないとして一部しか支払われないサービス超勤）

毎日事務所に来る社会保険労務士や金融機関の人からは、「疲れきってる顔だね。たまには休んだら」といわれる有様である。土曜、日曜の代休を取ろうにも、なかなか取れない状況で、周りに遠慮しながらとっている。ある仲間は、管理職から「代休どころではないだろう」と言われたとこぼしている。またメンタル障害から長期に休んでいる仲間もいる。

労働組合の対応、そして仲間たち

全国社保労は、「労働組合の社会的責任を果たす」とし、「労使共同」を繰り返してきた。「消えた年金」「宙」に浮いた年金」対策にはサービス残業、土、日出勤も「国民

の信頼を得、職場を守り、雇用を守るためには積極的に対応」という立場に立っている。

職場の仲間からは労働組合は無いに等しいという声さえ聞こえてくる。昨年一二月に開催された全国社保労組の議案書は、字が小さく一般組合員には見せたくないという感じさえするものであった。

昨年六月には、ボーナス一部（一〇％）の返納が求められた。新組織（今年一〇月に発足する全国健康保険協会、二年後に発足する日本年金機構あるいは厚労省〓本庁）に残るには、ボーナス一〇％の返納が条件であるという「うわさ」が流れた。

また、昨年不正免除問題で多くの国民年金事務担当者が処分を受けたが、処分者あるいは事務処理誤りをしたものは新組織にいけないという『うわさ』がされている。

実際、政府が設置した「年金業務・組織再発会議」の中の「日本年金機構の職員採用についての基本的考え方」では、法令を犯したものとや、いわゆる「覚書に象徴される業務改革に後ろ向きの者など公的年金業務に対する国民の信頼を著しく損ねた者が漫然と機構の職員に採用されることがあってはならない」としている。

こんな中でも、「俺は命と健康は売らない。労働力しか売らない。自分は労働者だから」とサービス超勤をしない仲間、ボーナス返納をしても新組織に残れる保証は無いから返納に応じない仲間が、全国の職員の中に一割いた。

土日出勤の代休を一週間まとめてとる仲間もいる。ある女性は、何と言われようとも超勤できる家庭環境が無いから残業しないで頑張っている。こんな仲間可依拠しながら、働き続けたいと思っています。（社保労組組合員）

J P 民営分社化から七ヶ月

― ギスギス満開の職場 ―

達成不可能な目標

民営分社化がスタートして七ヶ月。私の所属するA郵便局（窓口会社）は業務面の繁忙は落ち着いた。そして今は、営業面での締め付けと業務事故防止が強く言われている。

内務の営業会議も三回ほど開催されたが、一回目の会議から「窓口会社は営業の会社。営業できない者はいらない」「出来ないではなく、どうやったら達成できるのかで考えろ」と精神論が展開され、「ああ、やっぱりこんな感じになるのか」という気分になっている。当然、自分は実績が上がっていないので、非常にストレスを感じる一時間半だった。

会議後、他の人に聞いても感想は同じ。営業で収益を上げなければならないことは理解しつつも、達成不可能な目標が先にあり、また、「過去の亡霊そのもののカタログ小包販売」が依然と継続されているのを見ると、「この会社も、展望なしか」と思わざるをえない。確かに、劇的に収益の上がる〓儲かる施策なんてあるわけではない

し、経営陣の顔触れが民営化で変わったわけではなく同じ意識構造で今も動いているわけだからこんなものか。N T Tの同志も交流した時に、「すぐには変わらないよ」と言ってたっけ。

人間関係や職場の状況は、上司がイラッ！とするので冗談話もしづらい雰囲気があったり、業務不振者のレッテルを張られ郵便窓口に担務換えさせられた年配職員が、やはり仕事が覚えられず（病気が原因だと思う）、そのことに苛立ち、声をあげてしまふ担当課長。けっこう、ギスギス満開の職場。このほか貯金・保険の同世代二人が「事業会社へ転籍希望と申告」していたことも聞かれています。それだけモチベーションが低下しているのです。

また先日、特定局の渉外組合員から相談を受けた。「本気で窓口会社から郵便事業会社へ転籍したいなと考えはじめています…このままでは今後二五年、自分が仕事している姿が見えないさ」。こうした気分は、逆に事業会社の仲間も感じているのでは。

「決まったから実行してください」

いっぽう、自分は役職の一次選考に合格してしまい今度、面接がある。そもそも強制配転されて以降、「早く元職場に戻りたい↓窓口会社でないと内務勤務がない↓貯金保険に担務替え↓ただし、役職が条件」というベースがあつてここまで来たが、今の気持ちを正直に言うと、元職場に行けば保険もあり、それがネック。だったら通勤は嫌だが、今の貯金のほうがいい。ただ、営業がうるさく言われる中で、どうかとも思うが。

窓口会社は「総合服務」というが、過去にS局でも失敗しているし、最近の交渉情報を見れば保険の実績が著しく低迷している原因に総合担務があり、渉外でも一部、保険専担を復活させるという。なんで失敗の施策をいまでも取り入れているのかという不満を強く感じる。

六月から始まる夏のフェアにむけてロビーの飾り付けをするようになったが、営業会議でリーダーをはじめチーム編成がボンツと出され、「決まったから実行してください」とおろされてくることに、翌日、私との個別会話の時に「あれもこれも出来ない」と保険課長代理（旧・総務主任）から不満が漏れるなど、役職間でもあまり意思疎通がなくトップダウンで進められることの弊害も出てきている。彼自身、保険の業務推進リーダーに指定されていて、近日開催のフロントライン研修の講師準備や日々の保険業務で超繁忙。当然だと思う。

このように、人間関係もギスギスした職場の中に「将来への不安」「乱暴な業務指示」「切羽詰まった中での思いやりの欠如」など、さまざまな労働者の気分が存在している。

競争・分断・差別がなぜ職場に発生するのか、その資本主義の矛盾とあわせ、人間性を否定したりそぎ落とそうとするような職場管理を排除していかないと、みんな壊れてしまいます。

当面は、女性ばかりの非常勤職員さんを組織化するための食事を予定していますが、あわせてヒラ職員同士の食事も必要かな。

「民間になったから」と締め付けて職員を追い込めばやらざるを得なくなるだろう、という今の進め方では、職場は持たなくなると思います。自分としては、緊張感ばかりでなく、職場に笑いやホッとした雰囲気をきちんと確保しながら、「また明日も頑張ろう」という気持ちで仕事ができるような環境を作っていきたい。

以下は仲間の声です。

仲間はバラバラ、先が見えない

「民営分社化が仲間をバラバラの状態にしている。自分の職場以外で何が起きているか気付けない状態に陥っている。執行部を担う仲間は組合統合・支部再編と運営に忙殺される一方、空白期間は一般組合員から見ると、支部や各級役員との距離が遠くなったという印象を抱かせており、組合離れが急速に進行している。

だから目標や人員不足・労働条件低下に対する不満は上がってくるが、現場で起きている、生々しい現実が組合に集約されず、闘いが表面的になってきている。

組織拡大で期間雇用(非正規)社員の拡大が進んでいるが、組合員は積極的に動いていない。自らが組合に意義を感じていないし、何もしない組合に誘えない気分を表れ。

まず自分達の事を優先して何とかして欲しいというのが偽らざる本音。

一方、組織拡大で非正規に向き合っている仲間は、不安定な雇用、低賃金、劣悪な労働条件、本務者Ⅱ組合員の働き方への不満等、非正規の怒りをぶつけられながら、「正規」「非正規」の二分化・分断を何とかしなければと感じている。

あまりにも高く達成し得ない営業目標が掲げられ、士気は下がり職場の雰囲気は緩んでいる。

「コンプライアンス」「正規取扱い」が声高に叫ばれ、ミスは許されないと言う意味での緊張感はある一方で、無理な目標でやる気を削がれ、諦め・しらが蔓延している実態が明らかになった。

今回参加の全ての同志・先輩が、これから先の自分達の姿が見えないと訴えている。」

新銀行東京、築地市場移転、オリンピック招致

― 三文作家、さあどうする ―

東京の「大旦那」、小説家で国会議員だったテュー。マスコミがつくりだした幽霊みた人気で大店の主になっちゃった。この大旦那の小説ってどんなもんデエーって、今はやりのブックオフをはしごした。マンガ、CD、DVD、それにビデオてえのかな、そればっかりが並んでる。店員さん、お客さんも若者ばかりで、あたしのようなロートルは誰一人いやしねエ。ブックといやーみばえがいいが、ロクな本はありやーしネエ。ゴミ箱行きの本ばかりが、既存の古本屋さん以上の値段で並んでる。こりや、サ

ギだよナ。

そんな本屋だから、作家のアイウエオ順に本は並べられてんだ。あたしが知ってる石原の書名は『太陽の季節』だけ。あたしや、イの作家の欄を目を皿のように眺めたね。そこにやー、石原のイの字もねエー。東京の大旦那は作家でも小説家でもなんでもネエーって証明だ。この大旦那、「あたしや石原裕次郎の兄貴」と、選挙のたびに絶叫し、石原プロを総動員。そうやって人気を維持してるセコイ野郎だーね。

こんなトロイじいさんが大店「東京」で大人気。大阪、宮崎もそうだけど、票を入れる奴にやー知性の一カケラもねエ。それが日本の現状だー寂しい、悲しいとしかいいようがねエーよ。この大旦那、見得を切るだけが特技の持ち主とくらーね。衆院、参院議院時代になんか実績あるかってんだ。なにもネエー、の落第生だ。それなら知事を足場にと大店の主に名乗りでた。東京都民は大旦那よりも大バカで、奴っこさんを主にしちまった。マスコミはさらに大バカ。バカ旦那を持ち上げ、恥ずかしいとは思わネエー。社会の墮落だーね。

アイソボスの『イソップ寓話』ーこれ、ギリシャ時代なのねーにこんな名言があるだアネ。

「鷲が岩の上にとまって、兎を捕まえようと狙っていた。が、何者かがこの鷲を弓で射て、矢はズップと突き刺さった。羽根を剥（は）いだ矢筈（やはず）を目（ま）のあたりに見て、鷲が言うには、『自分の羽で死ぬなんて、踏んだり蹴ったりだ』

大旦那、オラー日本の大将だ、国もやれねエことをやるって、しゅしような心を起こしやがった。大銀行は青息吐息、中小企業に金貸さねエー。あたしや、中小企業救うんだって。大旦那がやったことといやー、環境に便乗したディーゼル・トラックの規制だけ。この業界は個人企業で、困ったのは彼らだーね。担保もとらず金貸すてっんだから、こりやー豪儀で、大旦那しかできやーしねエわな。大旦那はチャホヤされ、世界はおれ中心に回ってる。そんな唯我独尊の大旦那ほど、日銭に悪戦苦闘し、折りあらば金儲けしたいと虎視眈々（たんだん）の小零細企業主にすれば、「バカが来たー」てなもんだわねエー。借り得、あとは破産宣告すりやいいってんで、積もりに積もった不良債権で、資本金はゼロになっちゃった。これじゃ、営業つづけられないと、追加資金お願いよと、始まったのが四百億円の出資金。こりや「泥棒に追銭」だわな。都民は百%反対。だけど、石原与党の自民、公明は賛成し、野党の民主も「批判はした」の証拠だけ残しウヤムヤへ。石原銀行破たんは明らか。来年か、それとも三年先の知事選時か。次期知事選では、どの候補も石原銀行「終結」を政策に掲げることにならーな。

大店のバカ旦那のご乱行は、新銀行東京だけと思っていたら、まだあった。日本一、いや世界一の魚河岸（うおがし）の築地市場を取り壊し、豊洲に移転しよっていう話。これまたペラボウな話とくらー。築地は銀座から徒歩五く六分、大東京の一等地だアね。築地市場の広さは七万坪、東京に残された最大の公有地とされ、地価は坪当たり

二千万でエんだな。七万坪×二千万円、いくらになるかって、われわれみたような貧乏人にはわかりやーしねエ…、一、十、百、千、万…なんと一兆四千億円ってくらアナ。そこ売って豊洲を買おってんだ。豊洲の土地は十二万坪で地価は百万円とくらあし、こっちの方はいくらかと…千二百億円だわな。一兆四千億円から千二百億円をさっぴきやー、一兆二千八百億円ものボロ儲けとくらア。この金、いったいどうなるの。さらには、こんなベラボウな話にもすごい裏利権が動いてんじやとの話だあね。

豊洲の土地にさらにスキヤンダルがわいて出た。この土地は東京ガスの跡地とくらあね。地面の下は汚染物質でいっぱい。当初、安全基準の四十三倍、八倍とされたベンゼンとシアンによる汚染が再調査でなんとベンゼン四万三千倍、シアン八百六十倍にもなっちまった。

こんなところでスシネタ、サシミの魚が売買できるのかと、大旦那への批判は強まる一方。

石原さん早くおやめなさいと最後通告を突きつけてるのがオリンピックの問題とくらあ。あたしや、オリンピックなんて興味がないが、商売人は鵜の目、鷹の目だわね、金の成る木とくるからね。

石原は築地の跡地にメディアセンターをつくり、オリンピック再開発への目玉としたがってんだ。豊洲を安全にするためにやー、十二万坪を掘じくりかえさにやらん、それには金と時間がかかるわなあ。五輪招致は二〇一六年、それまでに工事は終りやーしねエ。

大店のバカ旦那、新銀行東京、築地市場移転、オリンピック招致で大失敗は必至とくらア、石原の任期はあと二年だから、その時石原はいやーしない。ツケを残して「サヨナラヨ」とくらあ。ツケを残して「サヨナラヨ」とくらあ。大昔、「日本の無責任男」を自認した芸能人がいたつけ、石原はそれ以上だわな。

◇ 編集部 だより ◇

▽女性読者から「一〇二八号に、北海道の『女知事』との言葉が二カ所も使われていますね。どうしてですか」とのおたよりをいただいた。おたよりの趣旨は「女性蔑視では」と感じ取りました。以下、お答えです。

△まず、隅から隅までお読みいただいていることに感謝します。原稿は①組合大会、②道州制です。『女知事』と記したのは、高橋さんが経済産業省（元通産省）出身で、中央省庁再編（脱官僚制度）、地方分権の「広告塔」として政府・権力者の主張を忠実に実行していることを皮肉ったものです。

▽政府や権力者は己の政策を実行するため、庶民受けする人物を立候補させるんですよ。大阪の『男知事』も同じです。

▽文意が正しく伝えられなかったこと、お詫びします。

自己責任で国の責任は放免

― 道州制導入の帰結 ―

すべては独占資本のために 「道州制とはなにか」について、これまでいろんな角度から考えてきた。そこからの結論は―

第一。道州制導入論は第二次世界大戦前、そして第二次世界大戦直後にも、権力者が唱えた「国家改造」策であった。

第二。道州制導入論は中曽根第二臨調（一九八〇年代はじめ）で行政改革論とともに論じられた。

第三。第二臨調の行革路線を継承する行革会議等が主要課題とした①規制改革、②地方分権推進が予期した以上に進んだ。

第四。日本航空、専売公社、電々公社、国鉄民営化が独占企業の利益をふくらませ（株上市場、国有財産払い下げ）、国営・公営関連事業への参入が次の目標となった。それが地方分権である。

第五。地方分権推進は平成の大合併となり、自治体数は三千六百から一千八百に激減、広域自治体も進んだことよって、政・財・官主導の導入論に、労・学・マスコミが動員され、今日の事態となった。

第六。自治体合併広域化は国営企業民営化策が地域崩壊を加速したように、貧しい地域の格差をひろげ生活をできなくする。

第七。道州制はその極地である。だから、幻想を与える必要がある。企業は地方分権で儲けに儲けているからなおさらだ。その典型が職業安定所による職の紹介から、ピンハネを認めた派遣法制定だ。このピンハネ制度を国家全体に行き渡らせたいのである。

「赤字」のウソ 道州制を推進する輩は、①中央・地方の赤字克服、②少子化、③官僚機構の腐敗、④中央集権制打破を理由にあげる。これらはすべて屁理屈、ためにする批判である。

中央・地方の赤字は一千兆円を超え、国民総生産五百兆円の二倍にもなると彼らは宣伝する。国にかぎっていえば〇七年末で八百四十九兆円といわれる。この数字は国の借金はいくらあるというにすぎぬ。国の資産はどれほどか。外貨準備金一兆（百七兆円）ドル、年金積立金百四十兆円、埋蔵金は五十兆だ。百兆だと自民党内でも論議は百出している。これだけでも軽く三百兆が軽くなる。こうして国の借金を減らしていけば、二百五十兆円にしかならぬ。億、兆は庶民には理解不能の数字だ。それをいふことに政府・財界はムクな国民をおどしつづけ、社会的負担を強制しつづける。

少子化もウソだ。子ども達が減り続ければ労働力は足りなくなる。需要と供給の経済法則は労働力供給が不足すれば賃金は上がる。わかりきったことである。にもかかわらず、なぜ若者の失業率が高いのか。定年退職者の「大人」が年金だけでは食えな

くなった。彼らは喰うために仕事を求める。若者―己れの息子―と職を奪い合っている。さらには、労働力政策の自由化（派遣法Ⅱ労働力のジャスト・イン・タイム化、「日雇い労働」合法化）で低賃金の若者が合法、非合法に安い賃金で労働する。若者は定年労働者と競争させられる。労働諸条件は絶対的に低下する。

「官僚」批判の愚 政治家は国家の本質を知らない。その典型が官僚制についてだ。憲法九条は「戦力」を否定する。これについて、どんなバカな保守系の政治家でも反発し、自衛権・国軍認知を求める。これが憲法九条改悪である。

官僚は時の政治権力者を国政運営・政策で支える根幹である。官僚制度なしに、階級社会の支配はない。官僚制度は中央だけでなく地方も同じ。官僚を自在に使いこなすのが政治家（各種議員・首長）である。

現状はどうか。政治家に官僚を使いこなす能力はない。それが今はやりの公務員批判である。官僚を批判し己れの人気を得ることで生き延びることを考える。官僚・公務員批判の急先鋒はＴＶワイドショー。それにインテリである言論界が悪乗りする。現代社会の腐敗はものすごい。官僚・公務員にとどまらぬ。もっとひどいのは資本―大企業から中小企業まで―である。最近「パワハラ」が喧伝される。権力者によるいじめである。権力者が懲戒解雇になったことはあるか。つい先頃、増田都子さんから職を奪った東京都教委と三都議が敗けた。最高裁は被告―東京都・三都議―の控訴を却下した。悪者はだれかが確定した。しかし、悪者は居座っている。

地方分権、省庁再編のウソ 地方分権、中央省庁再編で中央集権制はなくなったか。逆だ。中央集権制はさらに強まっている。中央省庁の出先機関は独立行政法人とかいう得体不明の機関に再編された。中央省庁の権力はさらに強くなった。中央省庁の天下り機関となった。

官僚、そして独立行政法人の人物群は旧国立・県立大学に送り込まれる。大学はそれ以外に企業の冠講座―研究資金が出される―で企業が推せんする人物を客員・特別教授として受け入れる。地道な研究を積み重ねたドクターがフリーター―特別研究生、助手―として苦勞をせまられる。

「国家権力」強化 道州制は政治体制をどのように変えたいか。

第一は、国家権力の強化である。国家権力は常備軍（軍隊）、官僚機構、それを維持する徴税権を基本とする。

道州制は①国、②県を廃止し新たに十前後で構成する道州、③三百市を基礎とする基礎自治体に行政機構を再編したいとする。彼らは「三層制」という。「三層制」だって？ 今でも国・県・市町村の「三層制」ではないか。「旧い」三層制と「新しい」三層制はどこがちがうのか。まず国家の役割が強調される。国家は安保・外交、治安（警察・裁判所・司法）、国の基本政策―教育、金融・財政、通商―の根本を専管す

る。この下に道州、基礎自治体（市町村）がおかれる。

道州は北海道の他十前後の州に、今ある都府県が再編する。道州は地方分権を前進させるとの偽装を行うため「地方政府」との冠をかぶせたいようだ。地方分権改革推進委員会「第一次勧告」、第一章国と地方の役割分担の基本的考え方に、「地方政府の確立は、自治立法権、自治行政権、自治財政権を有する『完全自治体』を目指す取り組み」というようにである。

政府・道州制導入論者のみくろみは国の赤字を地方に転嫁したいだけ。国は仕事を県・市町村に押しつけてきた。地方は「自由」にやりたいとする。この矛盾解消が「三位一体改革」に象徴された「地方分権推進」ではなかったか。「三位一体改革」は地方に負担を押しつけただけだった。自治体に権限、財源が移譲されない結果である。

道州制では国の出先機関の人員をどこが請け負うかが焦点となる。日本経団連「第二次提言」は○五年度末定員二十一万五千八百三十一万人を十二万一千人に、約九万五千人を減らすとの試算を示した。しかし、地方への財源移譲の数字はない。

最下位に位置付けられる基礎自治体（市町村、広域自治体）は国、道州制の下請け機関となる。

「三層制」と企業統治 道州制下の三層制は独占企業が推進する持株会社制の官僚制度への適応だ。持株会社―事業会社―下請・派遣会社の仕組みを国家機構にまで適応したいとするのだ。持株会社要員は二ケタ、多くて三ケタである、選り抜かれたエリート（キャリア）が頭だけで考えた企画・政策をつくり、道州に強制する。道州の役人は基礎自治体に投げ返す。

中二階の道州の役人は中央からの落ちこぼれ。中央にもどらんがため基礎自治体への管理・統制は強まる。基礎自治体は酸欠状態の魚と同じである。これがどうして地方分権、民主主義拡充か。

財源移譲への具体案はこれまで示された道州制導入案に一つもない。強調されるのは①自立、②自主財源充実、そして③消費税（地方消費税）活用は考え方の一つというだけ。しかし、現在の地方自治体の生命線である①地方交付税、②国庫補助負担金廃止だけはしっかり書き込んでいる。

道州制導入は①中央省庁、②政治制度再編に直結する。中央省庁は企画・政策立案のみに特化する。政治制度は十前後の道州を中心に国会、地方議会の再編となる。自治体の数は絶対的に減る。首長、各議会議員は減る。国会も減る。この中で衆・参の関係も変化させられることが予想される。

◇資料◇ 地方政府創造会議（「せんたく」）

活 動 目 標 の 概 要

地方政府創造会議は、地域主権の確立を目指し、自治体が住民の視点に立ち、地域の実情に合った行政を効果的かつ自律的に執行できる真の「地方政府」を確立していくために行動する。特に、

「地域」、「生活者」、「環境」起点でこれまでの政策を根本的に見直し、自己改革を断行するとともに、国民のための他方分権改革や日本社会のあり方について、広く国民各界各層に議論を喚起することを目標とする。このため、当面、次の三つの「せんたく」（洗濯・選択）テーマを設定する。

一、地域・生活者起点による徹底した「自治体のせんたく」（洗濯・選択）

透明性が高く、地域・生活者に開かれた自治体になることこそ「地方政府」確立の道である。このため、厳しい自己改革を自ら実行する。

二、地域主権・住民自治の視点に立った「国のせんたく」（洗濯・選択）

グローバル社会において国力を高めるためには、国は本来果たすべき分野に役割を重点化し、中央集権的な体制から地域主権型の社会構造に移行すべきである。このため、道州制の進展も視野に入れて、国と地方の構造的な改革を断行する。

三、真の国民主権確立のための「国民意識のせんたく」（洗濯・選択）

国民一人ひとりが主権者としての自覚を持ち、自分たちの生活に大きな影響を及ぼす問題について、受益と負担の関係を踏まえた上で、主体的に行動し、選択することができるよう問題提起する。

◇ 読者からのおたより ◇

東京で行動・バイト 梅雨入りの東京でのバイト・行動を乗り切っていきたい。今後ともよろしく。
「通信」は市川の方へ送って下さい。
(国労闘争団員・S)

編集部より 先日は楽しかった。またやりましょうや。

釣果、いま一つ 早いもので七月です。今年はまだ三回の釣り、釣果もいま一つです。四月のWさんとの釣りは一尾ずつ（岩魚、山女）でした。彼の釣りはスタイルが決まっていますね。「美しい」ことはすべてにおいて上手。
(新潟・K)

編集部より 国鉄共闘の集会で北海道のKさんと一緒にしました。「釣れた」と聞いたらニコニコ顔で写真。デカイ獲物九十センチ超える「イトウ」ちゃんでした。

花爛漫 北海道もやつつといい季節になりました。ぼたん、ライラック、エゾカンゾウと花たちが競い咲いています。
(旭川・S)

編集部より 東京では小さな庭にびつしりと花木、草花、とりわけ花だいこん（紫金草）が元気の労働運動、社会運動にも早く春が来るといい。世界の動きに少しばかり、というより大きな変化の兆しが現れてきた。意外とはやいかも。そのためには掘点づくりが大事ということでしょう。

JCO臨界事故裁判 JCO臨界事故健康被害裁判の控訴審第一回公判が七月三日にあり、いよいよスタートです。前日夜には総評会館で集会があります。ぜひご参加を！
(東海村・K)

編集部より ご連絡ありがとうございます。お会いでき嬉しかった。

職探し中 五月から失業者に。ハローワークに行っていますが、若い人でもパートといえども働く場がない状況。いろんなことで反撃の条件はあるのに……
(北海道・S)

編集部より 北海道の状況、ハローワークでの若者の求職状況をレポートしていただけませんか。米価のゆくえ ようやく田植えも完了。秋の米価がどうなるかが農民の最大の関心事。今のような低米価が続くと十年後米作りをする人は半減すると思います。世界の穀物不足の中で、日本はいつまでも輸入依存の農政を続けるのでしょうか。
(福島・T)

編集部より 米価、そして米価。減反や乳牛減らしに、自民党農政族からも批判がわき出ると聞きます。日本農政の矛盾と方策について考えていらつしやること書いていただけませんか。

アレイダ・ゲバラさん キューバ革命の英雄チェ・ゲバラさんの長女で小児科医のアレイダ・ゲバラさんが五月二二日、神戸で熱く語られた。キューバは医療大国でハバナにあるラテンアメリカ医科大学には中南米やアフリカ、アメリカ合衆国からもの三十ヶ国以上の国から一万人以上の学生を受け入れています。しかも無料。アレイダさんの話で感銘うけたのは、「貧しいキューバにできることがあなたたちにできないはずがない」とのしめくくりの言葉でした。
(兵庫・S)

編集部より 豊かな国が中心の多くの国際機関は、国際官僚の天下り機関でしかありません。毎日おこなわれる会議に金が湯水のように使われる。キューバは実務的ですし、実적입니다。